

## (6) 幼木園の管理

### ア 仕立て方法

幼木期の仕立ては、剪枝により頂芽の徒長を抑え、側枝の生育を促し、早期に生産性の高い樹体形状にすることが目的となる。

以下に定植してから成園までの標準的な仕立てについて記述したが、苗の大きさ、品種による樹姿の特性、地力や気象などの環境条件、生育の状況などにより剪枝法を変える必要がある。

#### (ア) 1年目の仕立て（定植時の剪枝）

定植時の剪枝は、植え傷みにより吸水能力が低下するため、葉を減らして蒸散を抑制し、根の吸水能力とのバランスをとり、活着を促進させる。これを1年目の仕立てと考え、活着後の生育に大きな影響をおよぼすことにもなるので、慎重に行う必要がある。

2年生苗の剪枝の位置は、地面から15～20cmとする。ただし、品種・苗の大きさ・株の配置・着葉状態等を勘案し調節する。また、着葉数は最小限10枚位残さなければならない。

1年生苗では、本葉5～6枚を残して主幹を剪除する。葉数が少ない場合は摘心とする。

2年目以降は2年生苗と同様の仕立てを行う。

#### (イ) 2年目の仕立て

原則として2年目の剪枝は行わない。これは、根の生育を促進し、根系の拡大を行うためである。このことにより夏季の干ばつ害を軽減できる。一時的に分枝数が少なく株張りが小さくなることもあるが、生育とともに回復する。

#### (ウ) 3年目の仕立て

剪枝位置は、30～35cm（開張型品種では40～45cm）であるが、分枝数や枝の伸び方によって高さを調節する。

生育の良い茶園では徒長しやすいため、剪枝の位置が高くなりやすい。このような茶園では一見株張りが大きく見えるが、樹冠部の充実が不足して、細枝が密生し極端な芽数型となる。このような茶園では成園化後に収量、品質への影響だけでなく、摘採面が不安定なために摘採作業に支障をきたす。したがって、基準に近い位置でやや低めに段階的に仕立てを行うべきである。

剪枝後徒長する傾向にある場合は、新芽の摘採を早く行うことで、芽数を増加させ、徒長を抑制する。また、分枝数の増加にともない株張りも大きくすることができる。

#### (エ) 4年目の仕立て

4年目になると分枝数もかなり多くなり、株張りもうね幅の60～80%に達する。したがって、摘採面積率も成園並の大きさになるので、4年目の仕立ては樹型形成に配慮した剪枝方法をとる。

剪枝の高さは40～45cm（開張型品種では50～55cm）で、前年の剪枝位置から5～10cm高い位置で剪枝する。生育良好な場合は二番茶まで摘採できる。

#### (オ) 仕立ての時期

2年目以降の仕立ての時期は、通常3月に行う。生育順調な場合は秋整枝の時期に剪枝してもよい。ただし、寒害を受ける園地では、春に行う方が安全である。

#### (カ) 剪枝位置の目安

剪枝の位置を決定する尺度として、株張／樹高の値を用いる。品種の樹姿によって異なるが、やぶきたで2年目の場合、樹高に対して株張りが1.5倍になる位置で剪枝を行う。以降3年目2.2倍、4年目2.4倍、5年目2.5～2.6倍を目安とする。（成園は2.5～2.7

倍が理想である。)

乗用型摘採機に合わせた仕立てをする場合も基本的には同じである。樹高が低すぎる場合は、可搬型の剪枝機を用いるか乗用型摘採機にアタッチメントを取り付けて行う。

表3 標準仕立て法（2年生苗を植えた場合）

項目 年	剪 枝			摘 採	
	時 期	高 さ	形 状	時 期	方 法
1 年	植 付 時	地 上 15 ～ 20cm	水 平	—	—
2 年	—	—	放 任	—	—
3 年	3月中下旬	30 ～ 35	水 平	一番茶のみ	はさみ摘
4 年	10月又は3月	40 ～ 45	やや弧状	一二番茶	〃
5 年	〃	50 ～ 55	弧 状	〃	〃

#### イ 幼木園の施肥

幼木園は、根の分布が浅く根量も少ないので、施肥による濃度障害を受けやすく、肥料利用効率も低い。そのため施肥量は生育状況の良否により決定することが重要である。

成園の施肥量を基準に樹齢別施肥量を表に示した。

植え付け当年は活着後から8月にかけて窒素、リン酸、カリ肥料を少量ずつ2～3回株元からやや離して（20cm程度）分施する。マルチ栽培の場合は、マルチを敷く前に、緩効性肥料を用いて1～2年分をまとめて施用する。

定植2年目・3年目の施肥は、株元を中心に幅広に均一に施用する。4年目以降になると、根はうね間全体に分布するので、全面に施肥して土とよく混和する。5年目以降は成園と同じ方法で施肥管理を行う。施肥時期は春から秋にかけ、数回に分けて施肥すれば良い。ただし、最終施肥時期が遅れないようにする。特に裂傷型凍害などの寒害を受けやすい条件の園地や、裂傷型凍害に弱い品種（おくだり等）は、最終施肥時期を7月下～8月上旬とする方が安全である。

表4 幼木園の樹齢別施肥基準 (kg/10 a)

成分 \ 年数	1年	2年	3年	4年	5年	6年(成園)
N	11	21	35	56	63	70
P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	4	7	12	19	22	24
K <sub>2</sub> O	5	10	16	26	29	32
対成園比	約15%	約30%	約50%	約80%	約90%	100%

## ウ 土壌管理

### (ア) 中 耕

中耕は表土を耕起し、土壌の膨軟性を高める。そうすることによって根の呼吸が容易となり、根の生育が旺盛となる。また、除草効果も大きい。年5～6回、干ばつ期をさけて、施肥と同時に行う。

なお、ロータリー式管理機は碎土によいが、土が極端に細かくなり不透水層が形成されやすくなるので時々深耕する必要がある。クランク型中耕機の利用が望ましい。

### (イ) 深 耕

造成時の耕起により物理性を極めて良好な状態にしておくことが大切である。多少経費がかかっても、できるだけ深く、丁寧に行う必要がある。植栽前に全面深耕(下層1.0～1.2m)を行っていない園地では、植栽後2～3年の間にうね間をバックホー等で70～90cm位深耕を行って土壌の物理性を改良する。

深耕の時期や方法は成園と同様、8月上中旬である。成園の場合より断根の割合は少ないので多少時期が早くてもさしつかえなく、梅雨時期に行ってもよい。

### (ウ) 敷 草

幼木園は根の分布が浅く、うね間が広いので寒風や乾燥の影響を受けやすく、生育障害の原因にもなる。土壌水分の蒸発防止や、気温変化に対する地温調節のために、株元に敷草を十分敷きこみ根を保護する。

また、傾斜地の園地は植付け当初に土壌の流亡が起こりやすいので、土壌保全を行うことが望ましい。敷草などでうね間を全面被覆することが望ましい。施用量は800～1,200kg/10aであるが、うね間の広さや敷草の材料によって異なる。